

「のき」がひらくもうひとつの共同性

ー上田市の市民活動にみる相互扶助とアナーキズムー

杉本 春陽

キーワード：上田、のきした、相互扶助、真正な社会、アナーキズム

要旨

本稿は、コロナ禍を機に長野県上田市で始動した「のきした」という事例を取り上げ、今日における地域の相互扶助関係の形成過程とその内外への影響を明らかにすることで、本来相反する都市と地域共同体という二者の接続可能性に一つの視座をもたらすこと、そして国家の存在下における現代のアナーキズムの実践を明らかにすることを目的とする。

本稿は8章からなる。

序論である第1章では、本稿の研究目的とその背景、論文の構成について述べる。第2章では、先行研究のレビューを行なう。はじめに事例に関する先行研究として、のきしたにおける「非対称な関係」の回避について論じた山森（2022）の研究を紹介する。その後理論面での先行研究に関して、利他・共同について論じてきた相互扶助とアナーキズムを提示し、グレーバー（2006）に依拠しながらアナーキズムの理論的系譜を明示する。そしてグレーバーとクロポトキンの接合を試みている小田（2021）の研究からアナーキズムを相互扶助研究の延長として補足可能であることを示す。第3章では、調査地となる上田市の基本情報と、調査対象ののきしたの概要および活動について簡潔に説明する。第4章では、本研究における調査の概要について述べる。

第5章では、のきしたの誕生経緯を分析することで、市民が主体となって相互扶助を実現する地域コミュニティの形成要因とその過程について明らかにする。第6章では、現場における「非対称な関係」を克服しようとする取り組みに注目し、構造的な支配関係の無い「対称な関係」がもたらす影響について明らかにする。また現場において「出会い直し」という言葉で表される現象の具体的な場面について取り上げ、具体的な他者との関係を論じてきた人類学の「真正な社会」という概念から分析を行い、「出会い直し」とはどのような現象なのかを明らかにする。第7章では、のきしたの活動がアナーキズムとの関連でどのように位置づけられるのかについて論じる。はじめに、教育と経済を地域の中でも実践しようとする取り組みを紹介し、「埋め戻し」という概念から分析を行なう。次いで、既存の社会制度への働きかけにより社会変化

を試みる実践例を取り上げ、のきしたにおける埋め戻し以外の社会との向き合い方を示す。最後に、これらの事例を相互扶助・アナーキズムの観点から分析し、既存の社会の枠組みの中でのきしたがどのような方策によって社会問題に挑戦しているのかを明らかにする。

最後に第8章では、5章から7章までの内容を整理し、本稿の目的に対する答えと残された課題について述べる。地域の中に生成した空白の「場」に、困難を抱えた人とそれを支援しようとする人が集うことで、相互扶助を志向するのきしたという市民の活動が上田市に誕生したことが明らかとなった。そしてのきしたは、非対称な関係の克服によって顔の見える具体的な人と人との関係性に基づく真正な社会を築き、上田市という都市の中で「二重社会」状態を形成することで、支援者と被支援者が固定されず双方が流動的に変化する持ちつ持たれつの相互扶助関係を可能にしている。この相互扶助関係によって、のきしたでは既存の社会制度を認めながらも、その制度から逸脱する領域を補完し、社会制度の持つ構造的な問題点を空洞化しているのである。「二重社会」という重層的な人間関係の空間を生成することで、のきしたは相反する都市と地域共同体の両立を可能にしている。また既存の社会制度の存在を前提としつつも、その制度に暮らしの営みを全面的に委ねるのではなく、自分たちの手で担うことのできる領域を形成し、社会制度とは別の、もう一つの共同性を形成しようとしている点に現代アナーキズムの実践としてののきしたの姿が見出される。

本論文は都市の中で相互扶助を実践する地域共同体を扱ったものである。新自由主義のもとに格差が拡大し、人間関係の希薄化や地域共同体の消失が叫ばれる昨今、人々が再び結びついて共同体を成し、相互に助け合う関係の再興は不可欠である。他者の犠牲によって自己利益を最大化するのではなく、目の前で助けを求める他者に手を差し伸べ、平等な関係を構築する中で、既存の社会制度とは異なるもう一つの共同性を創出しようとする姿を描き出す本研究は、都市と共同体という相反する二者の接続と、相互扶助の延長としての現代アナーキズムという理論に新たな視座をもたらすものである。